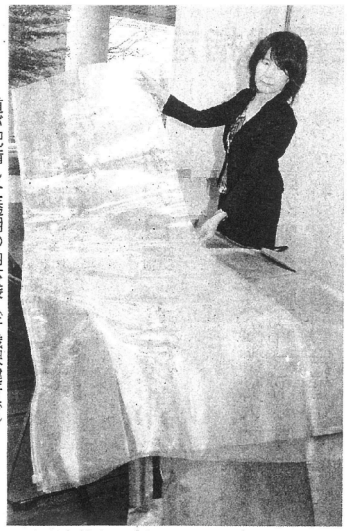
最期の別れ 一目でも

遺族配慮、保健所に配備

道、透明な袋で遺体収容



道が配備した透明の納体袋（千歳保健所で）

新型コロナウイルスで亡くなった感染者に遺族が対面できるよう、道がウイルスを通さない特殊加工が施された透明の遺体収容袋を、道内全30保健所に配備した。道などによると、これまでの死亡者全員に使われた。道は「遺族感情に配慮した最大限の準備」としている。

■特殊素材で製造

道が配備したのは、ウイルスの感染を防ぐ特殊な素材でできた透明の「納体袋」（長さ約2・2㍍、幅約85㌢）。従来は、道警が司法解剖のために遺体を保管する際などに使っていた。国内外で製造販売され、1枚数千円で販売されている。

感染者の遺体の取り扱いを巡っては、厚生労働省が2月25日、同様の納体袋に遺体を納めるのが「望ましい」と全国の自治体に通知を出していた。道はこれに先立つ同月中旬、都内の業者に発注していた。

■志村さん死去で注目

感染症で亡くなった人の遺族は、遺体と対面できないことがある。3月29日に70歳で死去したコメディアンの志村けんさんの場合、遺族は志村さんの死去後、一度も顔を見ることができず、火葬にも立ち会えなかった。

同省は、納体袋を使えば「遺体搬送を遺族らが行うことも差し支えない」との考えを示しており、道は対面できるように透明の納体袋を採用した。

実際に遺族が対面するかどうかは、感染者が最期を迎えた病院の方針に委ねられるが、道の担当者は「志村さんのようなケースを減らしたい」と説明している。

■感染疑いでも使用

納体袋を製造・販売する川尻工業（札幌市白石区）には、志村さんの死去後、全国の自治体などから問い合わせが相次いだ。川尻祥明社長は「袋に納めた後も『顔が見えるか』との質問が多い。感染者は闘病中も隔離されており、せめて遺族に最期の対面をさせてあげたいとの思いがあるようだ」と明かす。

道によると、感染が疑われてPCR検査を受け、結果が出る前に死亡する人もいる。このため道は、各保健所が、陽性の可能性がある遺体についても納体袋を使用することを許可している。